

寄稿



農家・農村も元気になる ボランティアホリデー

農家WEB企画制作 竹森 まりえ

ステイする人にとっての
魅力は「ふれあい」

農家のWEB制作を行うにあたり、クライアント農家のお宅に、数日間滞在させていただくことがあります。その間は寝食を共にさせていただき、日中は全体的にどんな作業があるかを、カメラとノートを片手に農家にずっと同行して取材を行います。取材時は、「実際にはどんな作業か」を体験するため、花苗の植え付け、収穫作業などもさせていただきま

す。さて、そんな農家宅での様々な体験で感じた「農家ステイ」の魅力は次のようなものでした。

ステイする人にとっての魅力

- 土と緑に触れ、心癒される
- ホストファミリーや周囲の人々の人情に触れ、心暖まる
- 作物ができるまでの行程に触れ、農作物の恵みに改めて感謝できる
- その土地の気候・風土・歴史・文化に触れ、その土地のもつ「個性」を体験できることで、日本の良さも改めて知る
- ステイ後の交流も通して、第2、第3のふるさとを得た気持ちになり、日々の生活の心の支えにもなる

情報交換で各地・
各世代の「今」を知る

さて、一方で、農家ステイは、農家にとつての、あるいは農村にとつての魅力もあります。私自身の実家（久万高原町の果樹園）が、かつて農業研修生を受け入れていたときの体験をまとめると…。



一度に大勢の人員で取り掛かるハウス張り作業などは、一人でも多くの手があると農家は本当に助かる

農家・農村にとつての魅力

- 情報をもつて入ってきてくれる農業研修生。研修生の出身地の情報なども聞くことができる。また、各地の様子を知ることができ、また、特殊な知識や技能を持つている人に、学ぶことができる。
- 農業を手伝ってもらつたことで、非常に助かる。
- ボランティアでできてくれるという意欲をもつた人に、日本の農業・農村の現状や課題を現場で伝えることができ、よき理解者の一人となつてもらつたことができる。
- 後々も交流があり、家族ぐるみのお付き合いもできる。

先日、高知県の四万十町にお邪魔したときのこと。うちの実家に農業研修生として来られていた方に、偶然にお目にかかりました。「懐かしいなあ」と言ってくださるその方とは、実に数十年ぶりの再会です。当時小学校3年生くらいだった私は、2ヶ月ほど滞在したその研修生のことをよく覚えていました。現在のよう

に情報があまり豊富ではなかった農村の子供にとつて「よそから来た人がうちで仕事をし、よく遊んでくれた」という思い出はとても刺激になつて記憶に残つたようです。

受け入れ側の体制整備は重要

さて、情報も流通も発展した現在では、農村と都市の生活様式の格差はなくなりつつあります。「農村は封建的」というイメージも、昔に比べると現実はかなり柔軟になっていきます。そんな変わりつつある農村の「今」を知ってもらうためにも、「ボランティアホリデー」は非常に有効なのではないかと考えます。



有機栽培のお茶農家で見せていただいた、自農園の取り組みについてまとめた資料。受け入れ側はこのような情報をあらかじめまとめておくと、自農園のことを効率的に理解してもらうためにも役に立つ。

一方、受け入れ体制をどのようにするかは考えなくてはならないでしょう。かつて農業研修生が来てくれていたときは、3度の食事はすべてうちの母が作るなど、研修生との距離はいわば「密着型」。でも、現在はプライベートな空間・時間をお互いある程度とることも大事だと思います。そういった意味では、宿泊は公共の遊休施設や地域の民宿などを予算に応じて選択できるシステムがあれば、双方に適切な距離感も保たれていて良いと思います。ただ、中には「もっと濃い時間を農家の方と共有したい」と思っておられる人もいます。多様な要望に応えられる体制と、情報発信があるとよいと思います。

また宿泊(住居)に関しては、久万高原町にあるような「空き家バンク」も有効活用可能だろうと思います。久万高原町では、かつて都市部の高校生の農業体験を受け入れた経験もあり(うちの実家も、りんごの農作業を手伝っていたきました)、さらにはグリーン・ツーリズムの推進も盛んなこともあって、今後「ボランティアホリデー」のメッカ・久万高原町になる可能性も高く秘めていると思います。ボランティアホリデーを通じて、都市と農村の交流が更に活発になることを願っています。